



平成23年春季特別展

たがね

## 鑿の魔術

～金工の名門・後藤家と刀装の美～

- 会場 企画展示室
- 会期 平成23年3月25日(金)～5月8日(日)
- 休館日 会期中は無休

刀を飾る金工品の数々。本来単なる「部品」にすぎなかったそれらの制作に、優れた技と芸術的感覚によって革命を起こしたのが、後藤家の祖・後藤祐乗ごとう ゆうじょうです。以降後藤家の「家彫いえぼり」は不動のトップブランドとして約400年にわたり君臨しました。

金銀その他の素材を自在に駆使した熟練じゆんの技巧、あるいは豊かな教養と研ぎ澄まされた美的感覚に裏打ちされた意匠いしょうの数々。そこにこめられた「職人魂」を感じ取ってください。また刀装具をめぐる金工師と時の権力者、ひいては一乗谷朝倉氏や越前松平家との関係にも、資料を通して迫ります。

### 後藤家十七代「御家彫」の歴史

三疋獅子図目貫 無銘 祐乗(個人蔵)



刀装具の金工品を芸術として完成させた初代・祐乘以降、約400年間・17代の長きにわたり後藤家は刀装具のトップブランド「家彫」を生み出す家として君臨し続けました。歴代当主の手になる作品は、後藤家の伝統的意匠として守り伝えられた「龍」や「獅子」をはじめ、江戸時代になって「家彫」から派生し新しい境地を築いた「町彫まちぼり」との競合によって生み出された数々の新しい技巧・意匠など見どころがたくさんあります。



這龍図目貫 無銘 光乗(個人蔵)

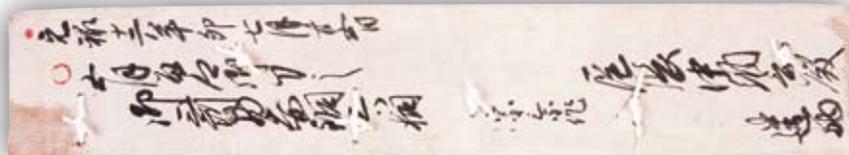
### 将軍家・大名家と金工師たち

刀は武家社会では儀礼や贈答において最も重要な品であり、その外側を飾る刀装も、儀典にのっとった格調高いものから贈答のための豪華なものなど、武家側の必要によってさまざまなものがつくられました。また「三所物みつところもの」など刀装具それ自体も収集や贈答の対象となり、特に将軍家や各大名家では後藤家の作品をはじめとして、「折紙つき」の数多くの品が台紙や包紙とともに保存されてきました。越前松平家も例外ではなく、歴代の藩主の好みの拵や代々の秘蔵と思われる刀装具の数々が伝存しています。そのほか各武家ゆかりの優品を紹介していきます。



桐紋図三所物 無銘 宗乗(個人蔵)  
徳川宗家伝来／台紙付属

現在重要文化財に指定されている名刀「五月雨江」(徳川黎明会所蔵)の拵に付いていた三所物であり、元禄12年(1699)7月15日に尾張徳川家4代吉通が父である3代綱誠の遺物として五月雨江とともに將軍綱吉に献上したものの。



元禄十二年卯七月二十五日  
五月雨江御刀之 尾張中納言殿  
御三所物赤銅三ツ桐 宗乗作 遺物

# 意匠の妙

刀装具をいろいろしている意匠には、武家の心意気を示すような鎧武者図、合戦図から花鳥風月のとりあわせの雅びな図柄まで、さまざまなものがあり、見る者を飽きさせません。また中には、「判じ物」のような、首をひねる題材や、有職故実や古典に取材した、図像の理解に相当の教養を要するものもあります。

つまり金工師には、鑿を自在に操る技術や、限られた空間を効果的に使って図柄を表現する絵画的才能に加え、上流武家にも劣らない深い教養が必要であったといえます。

その中でも「拵」全体でさまざまな表現に挑戦した作品を紹介します。

鐺と金具に銀地を用い、波濤図を高彫で力強く表す。鞘は青貝微塵塗(みじんぬり)地に霰(あられ)文を青貝螺鈿時絵(らでんまきえ)とした入念な作である。本資料の特色は柄全体を魚袋の意匠で表した点にある。魚袋(ぎょたい)とは、上級貴族が束帯着用で節会などの行事に臨む際、右腰に提げるもので、長方形の箱状の木を白鮫皮で包み、金や銀の魚形をつけたもの。中国唐代の「魚符」がもとになっている。この柄はその魚袋を忠実にかたどったもので、金具を波文としたのは、柄にあしらわれた魚の意匠に合わせたものである。



青貝螺鈿鞘魚袋柄打刀拵(個人蔵)



波濤鯉図一作短刀拵(個人蔵)

銀製の総金具(縁頭・栗形・鐺)に波濤の中を勇躍する鯉を見事に彫り出している。金具の動的な構図に対し、鞘には水草のたゆたうおだやかな水面に鯉が悠然と泳ぐ姿が蒔絵で表現され、その動と静の対照が印象的である。柄糸には当時から希少であった鯨髭を用いる。

## 一乗谷の金工師たち

近年、戦国大名朝倉氏の城下であった一乗谷朝倉氏遺跡において、さまざまな金工品を生産する金工師が活動していた痕跡と考えられる遺物・遺構が発見されており、注目されています。

戦国時代における刀装具の生産は、従来、ほぼ京都に集約されていたと考えられていましたが、当主の屋敷に近い、一乗谷の中核部でそういった工房の存在が確認されたことで、中央の文化を積極的に採り入れた朝倉氏の姿勢があらためて浮き彫りになったといえます。

また30点以上見つかっている、刀装具から直接型取りされたと考えられる「粘土型」の中には、後藤家の「家彫」の意匠の影響を受けながら、地方色とも言える特色のある製品も見受けられます。これら「粘土型」については出土例も少なく、用途など明らかでない部分が多いのですが、京都で確認されている遺物や金工師の家系に伝存する資料などと比較し、その性格について考えてみます。



二足獅子図目貫粘土型  
一乗谷朝倉氏遺跡出土  
(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館所蔵)

### 関連行事

「学芸員によるギャラリートーク」 日時：3月27日(日)・4月10日(日)・5月8日(日)  
午後2時～  
場所：本展会場にて

### 次回の展示

(松平家史料展示室)  
テーマ展「越前松平家の名品8」 日時：5月12日(木)～7月7日(木)

『展示解説シート No.57』  
平成23年3月25日発行

福井市立郷土歴史博物館  
〒910-0004  
福井市宝永3丁目12-1  
電話 0776-21-0489  
Fax 0776-21-1489  
担当：松村 知也